

第3講 教育理論とカリキュラム

学修到達目標

- ① 主要な教育理論（行動主義、認知主義、構成主義など）を理解し、それぞれの理論の特徴や学習に対するアプローチを具体的に説明できる。
- ② 特定の教育理論に基づいて、学習者のニーズや社会的 requirement を考慮したカリキュラムを設計し、その内容や指導方法を具体的に示すことができる。
- ③ 教育理論がカリキュラムにどのように影響を与えるかを分析し、具体的な事例を挙げてその関連性を論じることができる。

はじめに

教育理論とは、学習者がどのように学び、知識を獲得するのかを示すモデルや枠組みを提供するものである。教育理論の理解は、教師が有効な指導方法や学習活動を検討し実践することを支援する。

平成 28 年に公示された学習指導要領[1]では、教育課程の理念として「社会に開かれた教育課程」が掲げられ、授業改善の方向性として「主体的・対話的で深い学びの実現」が示された。さらに、学習の基盤となる資質能力として「言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む）、問題発見・解決能力等」が明記され、情報化への一層の対応を求めるものと

なった。一方で、「学習指導要領の内容が分かり難い」との声もあり、背景となる教育理論やその内容などが理解されていない実情が見られる。

教育理論の理解が十分ではない場合、

- ・主体的・対話的で深い学びの具体的な姿はどのようなものなのか
- ・深い学びとはどのように捉えると良いのか
- ・学習評価についてどのような工夫が必要なのか
- ・情報活用能力をどの学習活動の中で育成するのか

といった様々な面において、具体的な方略を描くことが難しくなるだろう。

本講では、「学習パラダイム」と呼ばれる教育理論について、学習観、教師の役割、評価方法、関連する理論などの特徴を概説する。これらの理解を通じて、教育理論に基づいた授業デザインや学習環境デザインの要点を掴み、DX時代の学びをデザインする「高度専門職としての教師[2]」の足場がけに寄与することを期待している。

1. 学習パラダイムの特徴

学習観の転換に働きかけてきた、4つのパラダイムと、DX時代の考え方の特徴について以下に整理する。

1. 1 行動主義

学習観：外部刺激への反応による観察可能な行動変容。正しい反応が強化されることで学

習が成立する。教師の役割：知識の伝達者、行動強化の管理者、学習環境の制御者。

主な学習活動：ドリル学習、プログラム学習、反復練習、暗記学習など。

主な評価方法：客観テスト、行動目標の達成度測定、正誤判定による点数化など。

関連理論：オペラント条件づけ、行動目標論、マスタリーラーニング、CAI など。

1. 2 認知主義

学習観：情報処理プロセスとしての学習。知識の獲得と構造化を通じて内的な認知構造が変化する過程と捉える。

教師の役割：情報の構造化と提示者、思考プロセスの支援者、学習方略のモデル提供者。

主な学習活動：概念マップ作成、問題解決演習、思考スキルの練習、メタ認知の育成など。

主な評価方法：理解度テスト、概念理解の評価、思考プロセスの評価など。

関連理論：Bloom's Taxonomy (初期版) 、スキーマ理論、認知負荷理論、ガニエの 9 教授事象など。

1. 3 構成主義

学習観：学習者が経験に基づいて能動的に知識を構成するプロセス。個人の既有知識に基づく意味の構築と捉える。

教師の役割：学習環境デザイナー、学習の促進者、問い合わせの提供者。

主な学習活動：探究学習、問題基盤学習、プロジェクト学習、体験を通した学びなど。

主な評価方法：パフォーマンス評価、真正の評価、ポートフォリオ、形成的評価など。

関連理論：改訂版 Bloom's Taxonomy、自己調整学習、問題解決学習、形成的評価、逆向き設計（Backward Design）など。

1. 4 社会構成主義

学習観：社会的相互作用と協働を通じた知識の共同構築。文化的・社会的文脈が学習に影響すると考える。

教師の役割：足場かけ（スキヤフォールディング）提供者、学習コミュニティのファシリテーター、対話・交流の促進者。

主な学習活動：協調学習、ディスカッション、知識構成型ジグソー法、相互教授法など。

主な評価方法：協働プロセスの評価、相互評価、ループリック活用、対話を通した評価など。

関連理論：状況的学習論、認知的徒弟制、UDL、TPACK モデルなど。

1. 5 コネクティビズム（社会構成主義と関連したデジタル学習基盤を活用した考え方）

学習観：ネットワーク内の知識源との接続と関係性の構築。変化する情報環境での適応的な知識形成を志向する。

教師の役割：ネットワーク構築支援者、知識のキュレーター、学習コーチ・アドバイザー。

主な学習活動：デジタルリソースの活用、SNS を通じた協働、MOOC 参加、マイクロラーニングなど。

主な評価方法：学習分析、形成的評価、デジタルポートフォリオ、リアルタイムフィードバックなど。

関連理論：Networked Learning（ネットワーク学習）、Digital Taxonomy、CSCL（コンピュータ支援協調学習）、Actor-Network Theory（ANT）

2. 各パラダイムの実践展開について

各学習パラダイムは、異なる学習観、教師の役割、学習活動、評価方法などを提唱している。行動主義では、学習観は外部刺激への反応的習慣化である。教師の役割は知識伝達者であり、学習活動としてドリル学習や暗記学習が中心となり、評価方法には点数可能なテストや行動観察が用いられる。年代的には最も古いパラダイムであるが、現在も実践されている学習活動や評価方法として根強いものがある。同様に「単元テスト」や「到達度評価」も、現在も適用されており、それらの起源は「認知主義」に遡る。構成主義では、学習観は経験による知識の能動的構築である。教師の役割は環境デザイナー・ファシリテーターとなり、学習活動は問題解決学習や探究活動が中心となる。評価方法はパフォーマンス評価やポートフォリオが用いられるようになる。これらは、現在の学習指導要領が求める教育実践に通ずるものである。さらに、社会的構成主義では、学習観は社会的相互作用

用による協働的知識構成となり、教師の役割は対話的ファシリテーターやコミュニティ構築者となる。学習活動は協働学習や対話的活動、プロジェクト学習などが展開され、評価方法は形成的評価、相互評価、ループリックが用いられる。

3. 学習指導要領との関連

3. 1 「主体的・対話的で深い学び」との関連

現行の学習指導要領が示す「主体的・対話的で深い学び」は、社会的構成主義パラダイムに基づくものだと考えられる。「主体的」とは、学習者を主語とした捉え方であり、能動的に知識を構築するプロセスを指す。これは構成主義の「学習者による知識の能動的な構築」に対応している。「対話的」とは、他者との相互作用を通じた学習を指す。これは社会的構成主義の「協働と相互作用」に対応している。「深い学び」とは、表面的な知識習得ではなく、意味や関連性を理解し、高次の認知過程（改訂版 Bloom's Taxonomy）を経由する学習を指していると捉えることができる。

3. 2 「社会に開かれた教育課程」との関連

「社会に開かれた教育課程」の考えは、社会構成主義（およびコネクティビズム）のパラダイムと関連する。社会構成主義では「文化的・社会的文脈が学習に影響する」と捉える。学習内容を実社会の文脈と接続することで学習の質が高まることを期待している。コネクティビズムでは、学習を「ネットワーク内の知識源との接続」と捉える。学校外の専

門家、地域社会、デジタルリソースとの接続により、対話の多様性が拡張され、より探究が深まり、本質的な問題発見や解決能力の育成に繋がると考えられる。

3. 3 情報活用能力の育成、デジタル学習基盤の効果的な活用との関連

学習指導要領では「情報活用能力」が学習の基盤となる資質・能力として明記された。GIGA スクール構想により 1 人 1 台端末環境を中心とした「デジタル学習基盤」が整備された現在、これらの能力をどの学習活動で育成するかが課題となっている。ICT の活用と関連した学習活動を構想する場合に、依拠する学習パラダイムの視点を持つことで、学習目標に対応した ICT 活用の方向性を明確にすることができます。

表 1 「学習パラダイムと ICT 活用・学習活動」

学習パラダイム	ICT 活用の方向性	学習活動の例
行動主義	反復練習・即時フィードバック	AI ドリル
認知主義	思考の可視化・構造化支援	概念マップツール
構成主義	探究・創造活動の支援	デジタル制作
社会構成主義	協働・対話の促進	CSCL、協働編集
コネクティビズム	ネットワーク構築・情報活用	デジタルリソース活用

特に、コネクティビズムの学習観である「ネットワーク内の知識源との接続」「変化する情報環境での適応的な知識形成」という考え方は、情報活用能力の育成とデジタル学習基盤を活用した学びの姿と重なるだろう。特に、Digital Taxonomy や CSCL（コンピュー

夕支援協調学習) などは、デジタル学習基盤を効果的に活用した学習活動をデザインするための指針を提供するものとなる。

4. 教師の専門性構築に向けて

4. 1 教師の役割の転換

学習パラダイムの変遷は、教師の役割の転換を求めている。行動主義では教師は知識伝達者であったが、社会的構成主義では、教師は学習コミュニティを構築し、対話的にファシリテートする者へと変わる。この役割の転換は、学習指導要領が求める教師の授業観や評価観の変化を考える足場となる。

4. 2 教育理論共有の重要性

同じ学校の中で、異なるパラダイムに基づいて教育実践が行われている場合、学習者の経験は一貫性を欠くことになるだろう。学習パラダイムの発展過程を学校全体で共有できるならば、教育実践や授業改善の統一的な方向性が見出され、児童生徒を主語とした「主体的・対話的で深い学び」や「社会に開かれた教育課程」「情報活用能力の育成」などの基盤形成を促進するだろう。

4. 3 教師の専門性の継続的な発展

学習パラダイムの理論的理理解に基づいて実践を改善することで、児童生徒の資質・能力の高まりをもたらすことが期待される。教師が理論的根拠を持つことで、授業設計や評価

の工夫がより具体的で有効になる。教育理論の理解は、教師の高度な専門性の構築と継続的な改善の基盤となる。教育 DX に向けたパラダイムシフトの時代において、教師が自らの実践を省察し改善していく足場には、理論と実践の統合があり、これにより教師の専門性が絶えず磨き続けられるものだと考える。

参考文献

[1]文部科学省, 学習指導要領「生きる力」, 2017.

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm

[2]文部科学省, 中央教育審議会, 教育課程部会 教育課程企画特別部会における論点整理について, 2025.

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/101/index.html

※学習パラダイムについては、以下の文献を参考に記載。

Predrag Pale, Juraj Petrović, and Branko Jeren, Learning Theories,

<https://learning-theories.org/doku.php>